

## 橋本循「原爆歌」初探

内 田 誠 一

Preliminary Research on the“Song of the Atomic Bomb” by Jun Hashimoto

Seiichi UCHIDA

### 要 旨

「原爆文学」には、小説・戯曲・詩歌・評論など多様なジャンルが存在する。だが、漢詩で書かれたものは極めて少ない。本稿では、橋本循「原爆歌」を取りあげて内容を分析し、あわせて土屋竹雨「原爆行」と比較する。さらに、吟詠家・平池南桑の漢詩「原爆少女像」を引いて、原爆を詠じた漢詩が少ない理由を考察する。

キーワード：橋本循、原爆、漢詩、土屋竹雨、平池南桑

### 一、序

「原爆文学」と一口に言っても、ジャンルは小説・戯曲・詩歌・評論など多岐に亘り、制作年代は一九四五年から現代に及ぶ。このように幅広い「原爆文学」という範疇に入るべき作品で、殆ど世に知られていないものも、かなり存在すると考えられる。

本稿では、橋本循博士の漢詩「原爆詩」を取りあげて分析を試みたい。なぜこの作品を取りあげるかと言えば、その理由は三つ。一つに、この「原爆歌」は、原爆文学の中で極めてマイナーなジャンルである漢詩の作品であること、二つめに、この作品が殆ど世に知られていない作品であること、そして三つめに、土屋竹雨の漢詩「原爆行」と共通点が見られることである。

加えて、土屋竹雨「原爆行」との比較を行ない、さらに平池南桑「原爆少女像」を引いて、原爆を詠じた漢詩が少ない理由を考察してみたい。

### 二、橋本循「原爆歌」の本文と内容

最初に「原爆歌」の作者・橋本循について略述したい<sup>1)</sup>。

橋本循（一八九〇～一九八八）、号は蘆北、福井県今立郡（現在の越前市）の人。中国文学者、文学博士。夙に『詩経』『楚辞』の訳注が知られ、王維や王漁洋の研究でも名高い。京都帝国大学文科大学文学科支那文学専科を修了し、その後、立命館大学予科教授兼専門学部文学科講師となり、爾後四十余年に亘り、立命館大学で教鞭を執った。また、戦後は文学科部長・文学部長・大学院文学研究科部長・学校法人立命館理事などの要職を歴任した。主な著書に『訳注楚辞』『王漁洋』『中国文学思想管見』などがある。2016年9月より、一般財団法人橋本循記念会から『橋

本循著作集』が逐次刊行されている。

詩書画を善くし、詩集に『蘆北山人詩草』（以下、『詩草』）がある。書は、学者らしい穏健篤実な書風で、書卷の気が横溢している（図1・図4参照）。なお、古代文字の研究で知られる中国文学者の白川静は、弟子の一人である。

さて次に「原爆歌」の本文掲げる。本文の文字は、図1に掲げる作者自身の筆になる「原爆歌」書幅（1973年）に拠った。なお、書幅揮毫より9年後の1982年に発行された『詩草』と比較すると、文字の異同が見られる（図2参照）。これについては、本文に続いて指摘したい。

君不聞	君聞かずや
昭和二十乙酉年	昭和二十 乙酉の年
八月六日廣島天	八月六日 広島 <sup>いつう</sup> の天
米機來襲投原爆	米機來襲して原爆を投じ
忽化焦熱地獄淵	忽ち焦熱地獄 <sup>たう</sup> の淵と化す
煙焱一閃百雷起	煙焱一閃 百雷起こり
日色爲暝腥風裡	日色 暝と為る 腥風 <sup>せいふう</sup> の裡 <sup>うち</sup>
膚破肉爛廿萬人	膚破れ肉爛 <sup>ただ</sup> 廿万 <sup>にじふまん</sup> の人
赤裸握拳無辜死	赤裸 拳を握りて 無辜 <sup>む</sup> 死す <sup>こ</sup>
連薨比屋悉焼夷	連薨 <sup>れんぼう</sup> 比屋 <sup>ひおく</sup> 悉く焼夷 <sup>こた</sup> し
茫茫廢墟只積屍	茫茫たる廢墟 <sup>た</sup> 只だ屍 <sup>しかばね</sup> を積む
兒別父母妻喪夫	兒は父母に別れ 妻は夫 <sup>なく</sup> を喪し
老弱啼泣聲甚悲	老弱 啼泣して 声 甚だ悲し
嗚呼	嗚呼
星霜屈指二十六	星霜 指を屈すること二十六
猶說夜深孤魂哭	猶ほ説く 夜深くして孤魂 <sup>こく</sup> 哭すと
人衆勝天是耶非	人衆 <sup>おほ</sup> ければ天に勝つは是か非か
百代譏評豈可覆	百代 譏評 <sup>きへう</sup> 豈に覆 <sup>あ</sup> へすべけん

次に、『詩草』に記載されている「原爆歌」との文字の異同を指摘する。第二段の「無辜」を、『詩草』では「睨空」に作る。第三段の「妻喪夫」を「夫喪婦」に、「聲甚悲」の「甚」を「最」にそれぞれ作る。第四段の「嗚呼」の二字は『詩草』に無い。また、「豈可覆」の「豈」を「何」に作る。

本作は大きく四段に分かれ、三度換韻している。第一段が「君不聞」から「忽化焦熱地獄淵」までで、「年・天・淵」（下平声一先韻）と押韻。第二段は「煙焱一閃百雷起」から「赤裸握拳無辜死」までで、「起・裡・死」（上声一紙韻）と押韻。第三段が「連薨比屋悉焼夷」から「老弱啼

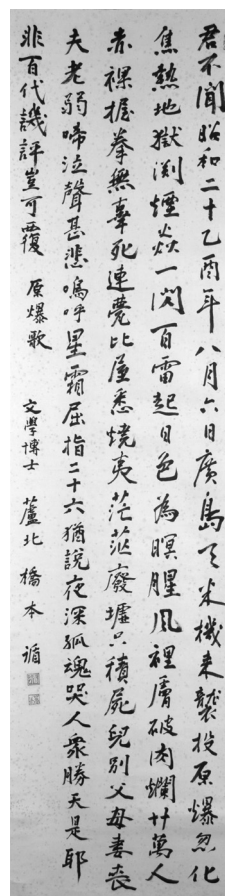


図1 橋本循筆「原爆歌」

泣聲甚悲」までで、「夷・屍・悲」と押韻。最後の第四段が「嗚呼」から「百代譏評豈可覆」までで、「六・哭・覆」（入声一屋韻）と押韻している。中国古典詩において、この入声の韻は、悲惨・悲嘆・悲憤・孤独などの情感を強めるのに使われることが多い。本作では最後の段に用いており、極めて効果的である。

詩型は七言古詩。詩題に「原爆歌」とあるように歌行体で詠じられた作品である。歌行は、もともとは楽府に基づくものであるが、唐代以降は歌謡と関係がなくとも「～歌」「～行」といった題をもつ作品が生み出された。「歌」と題されるものとしては、杜甫の「茅屋為秋風所破歌」や白居易の「長恨歌」、「行」と題されるものには、李白の「少年行」や杜甫の「兵車行」、白居易の「琵琶行」があり、いずれも人口に膾炙した作品として知られる。

本作の制作時期は、『詩草』の「原爆歌」の題下に「(昭和)四十五年」とある。白川静氏によると「ある施設からの依頼で、緞帳として掲げるために作られた」作品である。また『詩草』は、「三百部を作り、関係者の間に配布した」もの（「蘆北先生遺事」【立命館大学中国文学専攻のサイト】〈[http://www.ritsumei.ac.jp/acd/cg/lt/cl/shirakawa/rohoku\\_iji.htm](http://www.ritsumei.ac.jp/acd/cg/lt/cl/shirakawa/rohoku_iji.htm)〉）。この詩が世に広く知られることのなかったのは、そのためであろう。

詩の構成は次の通り。

第一段では、昭和20年8月6日、米軍機が広島に原爆を投下したという歴史的事実を提示。

第二段では、前段を承けて、原爆投下の結果、熱線・爆風によって20万（概数）もの罪のない人々が命を落としたことを言う。

第三段では、家々がすべて焼かれ、破壊された所には死体が重なり、家族を失った人々が悲しげに泣く惨状を描写する。

第四段では、26年の星霜を経ても、いまだに深夜に死者の魂が泣いているという話を引き、この残虐行為に対する批判は、後世も決して覆すことはできない、と強い調子で結ぶ。

「煙焔」は、けむりとほのお。「一闪」はひとすじの閃光。「百雷」は多くの雷が落ちたような閃光のすさまじさや轟音を指す<sup>2)</sup>。「日色為暝」は、太陽の光がキノコ雲に覆われて真っ暗となったさまを表現している。「腥風裡」は生ぐさい風の中。人も物も焼かれて異臭が立ち込めるさまを言うか。「無辜」は罪のない一般の人々を指す。「連覺比屋」は連なった家なみ。「焼夷」は焼き払うの意。「茫茫」は広くて遠いさま。ここでは廃墟が広範囲に遠くまで続く様子を言う。「星霜」は年月。「孤魂」は弔う人のない魂。「人衆勝天」は、人が多くて力も大きければ、天に打ち勝つことができるの意。『史記』伍子胥伝に、「吾聞之、人衆者勝天、天定亦能破人」とある。「人衆」は、ここではアメリカの人口が多く国力も強大なことを言う。「譏評」は、原爆投下に対する批判。

次に現代語訳。

君は聞いたことがあるだろう。昭和20年乙酉の年、8月6日の広島上空。アメリカ軍機が来襲

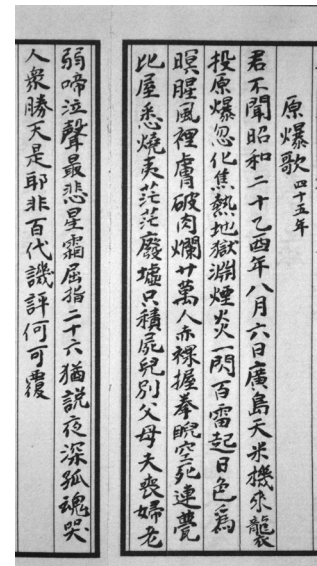


図2 『詩草』 卷二  
「原爆歌」部分の書影

して原子爆弾を投下し、広島が突如として焦熱地獄の淵と化したことを。

ひとすじの閃光がさしたかと思うと煙と炎があがり、多くの雷がおちたような轟音が聞こえた。生ぐさい風の中、太陽の光はキノコ雲に覆われて見えなくなり真っ暗となった。二十万の人が皮膚破れ肉爛れ、何の罪もないのに、焼けて丸裸で拳を握ったまま亡くなったのだった。

連なる家々はすべて焼き払われ、はるか遠くまで広がる破壊されたあとには、ただ死体が折り重なっている。子どもは両親と死に別れ、妻は夫を亡くし、老人や子どもが泣く声はひどく悲しげであった。

ああ、あの日から歳月は過ぎ、指折り数えて26年目、寄る辺ない魂が、深夜になると声をあげて泣いているという話を今なお聞く。アメリカは人口も多く国力も強大で（原爆を投下し、その行為を正当化すらしたので）あるが、世界からの批判の声に打ち勝つことができるであろうか。（「人衆勝天」というのは正しいのか、誤りなのか。それは誤りに他ならず、）後世になっても、アメリカはその批判を覆すことは決してできないに違いない。

### 三、土屋竹雨の「原爆行」との共通点および相違点

さて、橋本循より三歳年長の漢詩人に土屋竹雨（1887～1958・名は久泰）がいる。戦前に漢詩文の雑誌『東華』を創刊し、戦前戦後の漢詩壇で活躍。戦後は漢詩界の大御所となり、日本芸術院会員に選ばれた。また、大東文化学院専門学校校長・東京文政大学学長・文政大学学長・大東文化大学学長を歴任した。

土屋竹雨の詩集『猗廬詩稿』にも原爆を詠じた「原爆行」という作品がある<sup>3)</sup>。

怪光一綫下蒼旻	怪光一綫 蒼旻 <small>さうびん</small> より下り
忽地震天日昏	忽然として地震ひ 天日 <small>くら</small> 昏し
一刹那間陵谷變	一刹那 <small>いちせつな</small> の間に陵谷變じ
城市台榭歸灰燼	城市 台榭 灰燼に帰す
此日死者三十萬	此の日の死者 三十万
生者被創悲且呻	生者は創を被り 悲しく且つ呻く
死生茫茫不可識	死生茫茫として識るべからず
妻求其夫兒覓親	妻は其の夫を求め 兒は親を <small>もと</small> 覓む
阿鼻叫喚動天地	阿鼻叫喚 天地を <small>どよ</small> 動もし
陌頭血流屍橫陳	陌頭に血流れて 屍は <small>しかばね</small> 横陳す
殉難殞命非戰士	難に殉じ命を殞すは戰士に非ず
被害總は無辜民	害を被るは総て是れ無辜 <small>むこ</small> の民なり
廣陵慘禍未曾有	廣陵の慘禍 未だ曾 <small>かつ</small> て有らず
胡軍更襲崎陽津	胡軍 更に襲ふ 崎陽の津
二都荒涼鷄犬盡	二都 荒涼として鷄犬尽き
壞牆墜瓦不見人	破牆 墜瓦 人見えず
如是殘虐天所怒	是 <small>か</small> のごとき殘虐は 天の怒る所
驕暴更過狼虎秦	驕暴 更に過ぐ 狼虎の秦
君不聞	君聞かずや

啾啾鬼哭夜達旦　　<sup>しうしう</sup>啾啾たる鬼哭　夜より旦に達し  
 残郭雨暗飛青燐　　残郭　雨暗くして青燐飛ぶを

では、橋本循の「原爆歌」と土屋竹雨の「原爆行」について、共通点と相違点を考えてみたい。

まず、共通点として、数少ない原爆を詠じた詩の作者である2人が、ほぼ同世代の漢詩人であり、いずれも50代半ばから50代後半に終戦を迎えていることが興味深い。また、両者とも被爆体験がなく、新聞・雑誌の報道や被爆者の体験記などから原爆の悲惨さを知って、詩を詠じたものと思われる。

作品を見ると、どちらも歌行体の七言古詩であることが重要な共通点である。両者が七言歌行のスタイルを選んだのには理由があろう。それは、広島（土屋「原爆行」では長崎にも言及）に原爆が投下された歴史的事実をまず提示する必要があるため、絶句や律詩という短い詩型で原爆を詠ずるのは難しいからである。ましてや、原爆投下という残虐行為を批判するのは尚更困難である。よって、物語性のある内容を詠出しやすい歌行体を選んだと考えられよう。

さらに、二つの作品はいずれも、程度の差こそあれ、盛唐の詩人杜甫の名作「兵車行」（七言古詩）を踏まえていることから、中国の諷諭としての詩歌という伝統のもと、社会批判・政治批判の詩を詠じようとして、意図的に「兵車行」と同じ七言歌行というスタイルを用いたのであろう。橋本は最後の段で「猶説夜深孤魂哭」と詠じ、土屋はこれまた最後の段で「君不聞、啾啾鬼哭夜達旦、残郭雨暗飛青燐」と詠じている。これらはいずれも、次に引用する「兵車行」の最後の段を踏まえる。

君不見	君見ずや
.....	.....
新鬼煩冤旧鬼哭	新鬼は煩冤し旧鬼は哭し
天陰雨湿声啾啾	天陰り雨湿れば声啾啾たるを

橋本は杜詩の「旧鬼哭」を踏まえて「孤魂哭」と詠じ、土屋は杜詩の「旧鬼哭」と「声啾啾」を踏まえて「啾啾鬼哭」と詠じ、「雨湿」を「雨暗」に換えている。なお、中国古典詩の「鬼」は日本のオニとは異なり、「亡霊」「死者の霊」の意。橋本・土屋の両詩は、いずれも戦争批判の詩であり、アメリカ政治批判の詩なのである。

黒川洋一編『杜甫詩選』（岩波文庫、1991年）の解説では、「兵車行」の詩について、「この詩は、玄宗皇帝の無益な国境経営を非難攻撃したものであるが、このような眼前の生々しい事実を取り上げて、生々しいことばをもって歌ったものは、杜甫以前の詩では稀である」とする。原爆の悲惨さを「生々しいことば」で表現し、戦争批判を強く訴えるには、この「兵車行」のスタイル（歌行体）と詩語に倣うのが理想的と言えるであろう。奇しくも橋本と土屋が、ともに歌行体を用い、「兵車行」の最後の段を踏まえているのは、決して故無きことではないのである。

次に、相違点としては、橋本「原爆歌」が土屋「原爆行」に比べて、難しい詩語をあまり用いていないことが指摘できよう。この「原爆歌」を書き下し文で書いたならば、制作された昭和45年ごろの40代以上の知識層は、かなり内容を理解できたことであろう。本作が、ある施設の緞帳のために書かれたという「特殊な制作情況」を考えると、敢えて難しい語を避け、多くの人々にわかりやすい作品を作ろうとする意図が見えてこよう。白川静「蘆北先生遺事」では、「のちの



人もこの詩によって、当日の悲惨をしのぶことができよう」とある。

一方、土屋「原爆行」は、漢詩を鑑賞したり創作したりする知識層がまだ少なからず存在した昭和20年代の作と考えられる。よって、やや難解な詩語が含まれていることは否定できない。詩中に、「原爆」という和語の生語（熟していない語、新語や造語の類）を使っていないことも特筆されよう。橋本「原爆歌」が詩中に「広島」「米機」「原爆」という和語・生語を用いているのに対して、土屋は、「広島」を「広陵」、「長崎」を「崎陽」、「米軍」を「胡軍」、「米国」を「(狼虎) 秦」と、それぞれ言い換えている。和習（和臭）を排し、中国古典詩の歴代作品に連なるべき作品を書こうという姿勢が見て取れる。即ち、解る人だけに解ってもらえれば、それでよいということであろう。

これらの相違点は両作者の詩風の違いに加えて、制作年代の相違、制作意図・制作状況の相違に起因するものと考えられる。

#### 四、「原爆文学」の中で漢詩が極端に少ない理由 —平池南桑詩「原爆少女像」の出現をふまえて

これまで原爆を詠じた漢詩を二首組上に上せた。さきに「原爆が投下された歴史的事実をまず提示する必要があるため、絶句や律詩という短い詩型で原爆を詠ずるのは難しい」と記した。

しかし、原爆投下から10数年後に、五言絶句の原爆詩が誕生した。が、この作品は原爆投下それ自体を詠じたものではない。広島和平公園に建立されて、1958年に建立された「原爆の子の像」（図3）を詠じた詩である。この像は、原爆による白血病で12歳にして亡くなった佐々木禎子さんをモデルとしたもの。吟詠家の平池南桑（1890～1984）（注4）が作った漢詩「原爆少女像」は次のような作品である。

閃光炮嫩葉	閃光 <small>どんえふ</small> 嫩葉を <small>や</small> 炮き	かつて原爆の閃光が若葉のような少女を焼き
紅涙滿墟中	紅涙 墟中に満つ	少女の血の涙が廢墟の中に満ちた
白塔千羽鶴	白塔の千羽鶴	白塔のような台座に立つ少女は自ら折った鶴を高々とかがけている
長鳴落爆空	長鳴す 落爆の空	その鶴は原爆が投下された広島空に向かって声を張り上げて鳴いているように見える

「炮」は焼く。禎子さんは火傷を負わなかったが、被爆したことを比喩する。「嫩葉」はやわらかい若葉。ここでは、原爆の被害に遭った禎子さんを指す。「紅涙」は元来、美人の涙の意であるが、のちに血涙に譬える。ここでは禎子さんの流す血の涙。「千羽鶴」は、禎子さんが回復を願って病室で折った千羽鶴を指す。「長鳴」は大声で鳴くこと。

一海知義『漢詩一日一首 春・夏』（平凡社、1976年）では、「この詩、用語などにいくつかの難点がないではない」とする。そして、具体例として、「さいごの句も「落爆空し」とよまれかねないし、「千羽鶴」という和語には注を施す必要があろう」と述べている。「空」一字では天空の意とはならず、「空し（むなしい）」となるからである。加えて言うならば、「落爆」という語は中国古典語に見えず、日本語にもない。「爆（弾）を落とす」の意として作者自身が考えた造語であろう。蛇足ながら、現代中国語の「落爆」はひどく能力が劣る意。

このように和語や生語を多用しているため、いかにも和習の強い日本風の詩という印象を受ける。注4にも記したように、平池は福岡女学院の地理・歴史の教員であり、漢詩の専門家ではなかった。また、吟詠家の平池は、自ら吟詠するためにこの作品を作ったのであった(注5)。詩吟では、漢詩を吟詠することが多いが、あまり長い詩は吟詠されず、絶句が吟詠されることが多いようである。即ち、吟詠のための原爆詩を作るとなると、短い詩で、しかも耳で聴いてすぐに内容が理解できる作品に限られよう。いきおい五言か七言の絶句とならざるを得ない。となると、原爆の悲惨さを詳しく描出することは叶わない。また、この詩で最も重要なタームである「千羽鶴」は、やはり古代漢語に改めるのは困難であり、万一、改められたとしても、一般読者には難解となるに違いない。原爆の子の像という、当時新聞でも有名になった具体的な像をモチーフとして、平池が五言絶句を創作し、和語や生語を用いたのも、至極当然の成り行きであったと言えよう。

前半二句で悲惨な過去を詠じ、後半二句では平和な現在(創作当時)を詠じて、コントラストをつけている。後半二句の「白塔の千羽鶴 長鳴す 落爆の空」は、平和な未来への夢を抱いて、今なお千羽鶴を捧げる人々の心を鮮やかに描出している。大空に向かって鳴く千羽鶴の声は、原爆の犠牲となった少女の哀声であると同時に、この少女を含めた世界平和を希求する人々の、天へと響きわたる大いなる叫びでもあろう。

さてここで、「原爆文学」の中に漢詩で書かれたものが極端に少ない理由を考えてみたい。

戦後になると、誰もが漢詩に親しむ時代ではなくなってきた。次第に漢詩を作る人も少なくなり、理解できる人も少なくなっていった。原爆詩を創作した橋本・土屋・平池の三者が原爆詩を詠出した満年齢は、橋本80歳、土屋58歳以降、平池68歳で、当時の感覚では等しく老齢であったことは、単なる偶然ではないだろう。

また、漢詩で原爆を詠ずるにはかなりの技量を必要とすることも指摘すべきであろう。橋本・土屋のように、中国文学や漢詩の専門家であれば七言歌行体で原爆の悲惨さを詠じたうえで、戦争に対する批判の気持ちを高らかに謳いあげることもできよう。しかし、専門家ではない人々が七言歌行体で原爆を詠じようとするには、よほどの技量が無ければ、上手くいかないのではなかろうか。ましてや、歴史的に範例の無い原爆の漢詩を作るとなると、更に難度が高くなるわけである。

加えて、原爆を詠ずる目的も関係してこよう。「原爆文学」は、作者が同時代の人々に訴えかけようとするだけではなく、未来の人々にも原爆の恐ろしさを伝えたいという意図が強くあるのではなかろうか。とするならば、未来の人にもわかりやすく記述しようという意識がはたらくのは極めて自然であろう。

漢詩で書かれた原爆詩が極端に少ない理由は、次の4点に纏められるだろう。

- 1、戦後は漢詩を読み、漢詩を創作する人が戦前に比べて減少していったこと。
- 2、原爆の悲惨さを詳しく描出し、戦争批判を詠じようとするならば、かなりの技量を必要とす

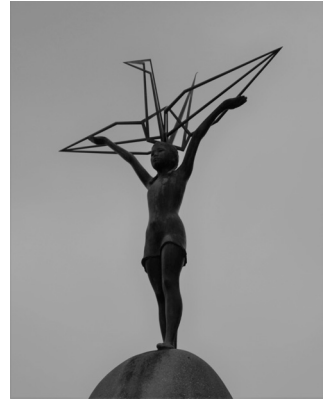


図3 原爆の子の像(部分)  
(筆者撮影)

る。また、絶句や律詩では字数が足りない。「兵車行」のような七言歌行のスタイルは、絶句や律詩のように誰でも創作できるとはいいがたいこと。

- 3、原爆を詠じた範例としての漢詩が、広島原爆投下以前には当然のことながら存在しないため、どのように詠じたらいいのか困難なこと。
  - 4、原爆詩を創作する場合、原爆の悲惨さを現代の人々のみならず、後世の人々にも伝えようとする意識が自ずと働くであろう。漢詩の鑑賞能力のある人が次第に減少傾向にある状況下で、平易なことばで後世に伝えようとするならば、古典詩は敬遠されたであろうこと。
- 以上のような理由で、原爆文学の中には漢詩が極端に少ない、と言えるのではあるまいか。

## 五、結 語

橋本循「原爆歌」は或る施設の緞帳のために書かれたもので、和語や生語を用いて、多くの人に解りやすく詠じられた漢詩であった。あまり世の中に知られていない作品を、本稿で紹介し内容を分析できたことは、筆者にとってありがたいことであった。さらに、土屋竹雨「原爆行」と比較することによって、両作品の制作意図や制作情況の違いが浮き彫りになった。加えて、吟詠家が自ら吟詠するために創作した、平池南桑の「原爆少女像」を提示した上で、三者三様の詩風・特色を考えると、原爆文学において漢詩作品が極めて少ない理由も自ずと見えてきたように思われる。

日本文学史の中で、漢詩文の伝統が非常に重要な位置を占めてきたことは、言を俟たない。しかし、明治の文明開化と欧化政策、昭和の敗戦とアメリカ文化の流入という二度の変革期を経て、今や漢詩文の文化と伝統は危機的状況にあると言えよう。今後の日本語における漢語はどうなっていくのか、将来の漢文教育はいかにあるべきか、我々が智慧を絞らねばならぬことはたくさんある。

今回、「原爆歌」の内容分析から進展させて、「原爆文学における漢詩」という視点で僅かながら考察したことは、今後の漢文や漢文教育に関する課題を考えるうえでも、何らかのヒントや端緒と成りうるのではないか。

## 注

- 1.『橋本循著作集 一 中国文学思想管見』（橋本循記念会、2016年）の巻頭に掲げられた芳村弘道氏の「『橋本循著作集』発刊の辞」を参照した。
2. 国立広島・長崎原爆死没者追悼平和祈念館 平和情報ネットワーク ホームページの「体験記を読む」に、入江健一氏の被爆体験記が収められている。その文中に「百雷が同時に落ちたような物凄い閃光が走り、激しい轟音と爆風で兵舎は崩壊し、私は吹きとばされ、崩壊した兵舎の下敷きになって意識を失った」という証言がある。

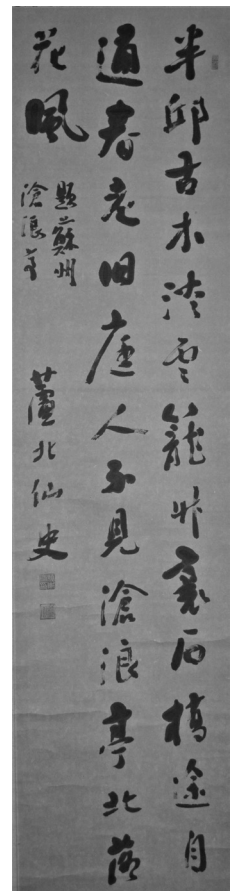


図4 橋本循筆「題蘇州滄浪亭」



3. 書道家の石橋犀水の筆でこの詩を書いた作品が、広島平和記念資料館に所蔵されている（同館識別コード：07—0016、寸法219×126㎝）。
4. 平池南桑については、『平池南桑詩集』（私家版、1966年）の著者略歴が詳しい。  
「明治廿三年大分県に生る。県立宇佐中学卒。大師（現大分大学）卒。専卒資格検定合格（文部省）。大学卒単位認定（九大総長）。高等学校教員免許状。福岡女学院勤務三十三年退。漢詩作六十年前旧豊後森藩儒者園田天放先生に師事。明治四十二年七絶七首五律一首を雑誌に初めて発表す。昭和三十年菅公配所榎寺に移居、文神の威霊を拝し作詩に専念す」  
また、後藤文雄『詩吟入門』（社会思想社、1973年）には、「昭和二十年六月、太平洋戦争終結の直前に、学徒兵の長子をを失い」という記述も見える。  
平池が「原爆少女像」という作品を詠じたのは、平池自身が不幸にも我が子を早く喪ったことや、長年、女学校で教鞭を執っていたことも起因しているのではなかろうか。  
さらに、『福岡女学校五十年史』（福岡女学校、1936年）の「福岡女学校教員一覧」の「現教職員（昭和十年四月現在）」の項に、「地理・歴史 昭和五・四 教員幹事 平池次郎」（244頁）とある（担任学科目・就職年月・職名・氏名を表す）。福岡女学校は現在の学校法人福岡女学院。1885年に、米国宣教師のジェニー・ギールにより創立された「英和女学校」がその前身であり、今年創立百三十年を迎える。  
なお、本稿での「原爆少女像」詩の拙訳では、『平池南桑詩集』の作者自注を参考にしている。
5. 平池南桑は吟詠家として世に知られていた人物であり、テイチクレコードから発売された「池南桑先生米寿祝賀記念 南桑詩選名流吟詠特集」というレコードも残されている。自ら吟詠するために、多数の漢詩を自作したようで、現在でも「原爆少女の歌」「道」「石川啄木」などが世間で吟じられているようである。

〔2018. 9. 27 受理〕

コントリビューター：富永 一登 教授（日本文学科）

